

## 飯伊森林組合 平谷事務所

調査団体名	: 飯伊(はんい)森林組合 平谷事務所	団体代表者名	: 飯伊森林組合西部支所 鈴木 元
設立年	: 1976(昭和51)年	対応してくれた人の名前	: 鈴木 元
団体URL	: <a href="http://hanishinrin.or.jp/">http://hanishinrin.or.jp/</a>		
活動拠点	: 長野県下伊那郡平谷村内森林	調査員	: 近藤朗、石原淳、浜口美穂
取材日	: 2015年12月9日	レポート作成者	: 近藤朗

## 活動内容

飯伊森林組合は、長野県最南部の飯田市、下伊那郡を所管する森林組合で、この下伊那地域(1市3町9村)の面積は1,929km<sup>2</sup>(森林率は86%と極めて高い)。1976年に14森林組合が合併し設立されたものであるが、2006年に飯田市森林組合とも合併するなど変遷してきているものの、この地域では根羽村(根羽村森林組合)と阿南町の和合地区(和合森林組合)は合併せず、独自の組合活動を展開している。

飯伊森林組合の保有施設としては、木材流通センター、きのこ流通センター(しいたけ)、小径木加工施設を運営する他、福利厚生施設「昼神荘」があり、ここで林業講座なども展開している。なお、管内は広く5つの支所がある(2008年再編)。

- **平谷事務所(平谷村)** … 平谷村は飯伊森林組合の西部支所管轄(阿智村・平谷村、浪合村(2006年合併)と清内路村(2009年合併)は阿智村に合併している)であり、鈴木元さんは、この支所職員。平谷村は面積約77km<sup>2</sup>で、長野県で最も人口の少ない村として知られている。(2005年3月時点で589人、現在は480人程度とのこと)。村の96.7%が山林、組合では大体3,000~4,000haを管理している。
- **鈴木元さんのこと** … 平谷村生まれで平谷村育ち、就職は長野市で別な仕事をしていたが、辞めて平谷に戻ってきた時に平谷の事を良く知っているだろうと見込まれ、声をかけられ現在の仕事に従事することとなった(2001年)。西部支所において主に平谷村を担当し、阿智村にも調査に出かける。2014年には森林施業プランナーに認定される。2012年には当地の経営計画を策定した。現在38才(取材時点)。

\* 今回の取材は飯伊森林組合というより、主に平谷村で森林管理に取り組む鈴木元さんという視点で行っています

## キャッチフレーズ

## 「人づくりは村づくり」～ 矢作川の源流の森からの発信

- ・ 総合的な観光立村を目指す長野県で最も小さな村のメッセージ
- ・ 都会になる必要はない

## 鈴木さんのモットー(何を大切にしているか)

- 水の循環は農林水産業のサイクルと同じ  
… 山に始まり田畑を潤し、人々の生活用水として活用され、海にそそぐ水は皆に恩恵を与えるもの。その水は皆で保全すべき。したがって、源流も地元の間人だけで守ってはいけなし、源流の間人だけでは守れない。未来の子供たちに返せるものを。

## 設立(入組)から現在に至るまで変化したこと

- 入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、様々な補助金をいただき作業を実施しており、その中で間伐作業量が増えました。
- 平谷村について言えば、やはり人口の減少が大きい。私は現在平谷ではなく飯田市に住み通っている。これは子どものこと(遊び友達などの教育環境)を考えての事であり、これから人(特に子どもたち)をふやしていくこと、繋がりをつくっていくことが重要だと思います。

## 連携している団体・専門家・自治体など

平谷村(役場):連携しているというより、村は私たちを何かと頼りにしている関係だと思えます。例えば道の駅(R153)の山などでは、特に観光間伐を進めており、私たちに依頼が来ます(取材日当日もこの作業中でした)。

## 山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

鈴木さんの元で伐採等作業を行う造林チームは現在6名。その内3名が長野市、福島、福岡からの「Iターン」です。「平谷に住みたい」という方はおり、村営住宅など利用しますが、今後ずっと定住して下さるかどうかが鍵となります。木材の搬出作業チームは、造林班とは別に阿智村の衆を中心に行っています。

「平谷村の鈴木さん」としては、消防団員であると共に、3人ほどの仲間で地歌舞伎に取り組んでいるところです。なお、お母様は、道の駅信州平谷内の「高嶺蕎麦」にて働き、五平餅の普及にも一役買っています。

## 現在直面している課題 ～ 今後やってみたいこと

- 組合については入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、林業経営そのものは、人手の確保を含めとても大変な状況になっている。
- 木材価格が安すぎる。現在7,000円/m<sup>3</sup>程であるが、15,000円は必要であろう。
- 平谷の山は搬出用作業道が作りづらい地形であり、これを確保することが大きな課題である。
- 平谷の森のあり方について自分なりの考えはあるが、一方でまずは経営面を優先させなければならないジレンマがある。

### 【今後やってみたいこと】

これらの課題解決を何とかしたい。ジレンマの中で現在模索中です。

## チームオリジナルの質問 鈴木さんの考える平谷の森のあり方と伝えたいことは何ですか

今、私たちが取り扱っている生産林の他に、森には矢作川の水源林、保全林という意義・機能も大きく、川の近くであるとか、必要な場所においては、ナラなど原木林を増やしていきたい。生産林と原木林をきちんと分けて管理体制をつくるべきだと思う。現行の補助制度の中だけでこれを進めていくことには限界があり、山は個人所有で本当にいいのだろうかとも思う。水源林、原木林というものは村にとっても必要なものであるし、下流にとっても大事なはず。そろそろ、このことを国レベルで考える時代なのではないか。森を適正に管理するための林道・作業道にしても、山をくずさない事も重要であり、もっと公益的(公共)事業としての展開を望みたい。

## 取材者(近藤)からのメッセージ

今から20年ほど前、小さな息子を連れて初めてそり遊びをさせたのが平谷村のスキー場であり、頻繁に通いました。帰りには必ず道の駅信州平谷に寄り、「ひまわりの湯」に浸かっていました。我が家にとって、名古屋から平谷は最も身近な山村であり、矢作川の源流を意識させる存在でした。(当時は豊田土木事務所で矢作川など河川を担当)また、当時の平谷村は人間地上絵コンテストで優勝し、珍珍幕府と銘打った村おこしを展開するなど、非常に個性豊かな地域だというインパクトがありました。

今回の取材で懐かしさを覚えると共に、国道153号が私たち(まち)を源流(山)に誘う魅惑のルートになりえること、その可能性について思いが至りました。子どもがもう少し大きくなると浪合村(現阿智村)の治部坂高原スキー場や、ヘブンスそのはら(阿智村)へ、売木村など下伊那地域の日帰り温泉にもよく行きました。私の場合は子育てのためでしたが、この「山村再生担い手づくり事例集」調査により、矢作川源流域での数多くの地域のタカラモノが発見できました。まちにないものがここにある、人が育つために必要な何かがある、ということを感じさせる地域として発信したいですね。

写真



飯伊森林組合 平谷事務所 鈴木元さんと作業中の造林作業チーム(道の駅信州平谷付近)



整備されたヒノキ林と取材風景